

寄 書

妙蓮寺障屏畫についての一正誤

土 田 杏 村

田中喜作氏が「妙蓮寺障屏畫に就いて」を論ぜられるにあたり、私の長谷川等伯研究をまで顧慮せられたことは、私として光榮の至りであり且つ氏に感謝に堪へない次第である。併し氏は或ひは私の可なり以前に公表した説文を讀過せられた際の記憶によつて記された爲めでもあらうか、私の説として氏のあげられたものと、私が既發表の論文に就いて公表した意見との間には多少の相違があるから、今そのことだけを記して、本誌を通じ卑説が世に傳へられることの正誤をなして置きたい。

田中氏の論中には、妙蓮寺屏障畫の筆者につき、

「近時土田杏村氏は東洋美術誌上に於て本寺筆者を長谷川等伯に擬せられた。」

「土田氏の推定の如く、本寺の畫者を等伯と推定して過誤なきに近いであらうか。」

と記されてゐるが、私が實際『東洋美術』誌上に於いて論じたところは右とは異り、次の如きものである。

「ここに近畿の屏障畫について、長谷川派の多くの作品を確定することが出来た。その第一には、智積院全部の襖畫がある。これは等伯のかいたものとして、全く疑はれない。次には妙蓮寺の襖畫全部がある。これは等伯筆といつてもよい程によく類似したものはあるけれども、細部に於いて多少の相違があり、なほ等伯ほどの迫力を持たず、清麗の感じを帯びるものであるから、「古畫備考」に等伯の第二子久藏のことをかいて「大抵守父法而精密」といひながら「爲畫清雅過於父」といつてあることに合致し、或は久藏の

筆といふがよいかも知れない。併しなほ宗也などの作品であるかも知れないし、等伯自身の異つた時期に於ける作品であるかも知れない。これを何れかに決定することは、單なる推測となるから、私はその結論を慎みたい。併し何れにせよ、等伯派のかいた裝飾畫であることだけは、疑へない。」

この文によつて明らかなる如く、妙蓮寺襖畫について私はその筆者を「等伯である」とは「推定」せず、却つてその筆者を何人にか推定することを今の場合慎しむべきものとなしてゐる。ただその文中「等伯自身の異つた時期に於ける作品であるかも知れない」といふ言葉があるから、その部分だけを見れば等伯推定説をなしたもののやうに見えるでもあらうが、全文を讀めば分るやうに、これは立て得られるだけの可能説を數へ上げたに過ぎず、觀察の事實としてはこの襖畫が細部に於いて等伯の他のものと異り、また等伯ほどの迫力を持たないことを述べてゐるのである。今もなほ私は、妙蓮寺襖の筆者を等伯に甚だ似たものではあるが、恐らくは等伯とは違つた人であらうと考へて居り、その構圖皴法細部の實證的比較や、智積院の金箔の大きさ三寸六分に對し妙蓮寺のもの三寸三分及び四分である點などから見て、妙蓮寺の襖は智積院のそれを念慮に置きつつ智積院のものよりもおくれこれを描いたものと考へてゐる。その他研究結果について述ぶべきことは多いが、今は正誤文であるからそれを記さない。また何故等伯が異なる時期にかいたものであるといふ推測説も、單なる推測可能説としてならば立てられるかといへば、私は元來、或は永徳、或は山樂といふやうな作家の一の「概念」より出發することを避けようと欲するものであり、屏障畫に對する私の實證的研究も全くその立場より出發したものであつたが、一の作品に對し「これは等伯ではあり得ない」と「概念の等伯」を以て斷定することを避け、妙蓮寺の襖畫と同じ様式のものであつてなほ等伯の款識あるものが今後發見せられたとすれば、慎重に比較研究した結果なほその事實を尊重するより外に仕方がない場合、この襖畫を等伯筆と斷定し、我々の持つ「等伯の概念」に一の修正を加へなければならぬと信するからである。併し今の私の持つ既知識を以てともかくも一の斷定をなせといはれるならば、既に述べた如く私は妙蓮寺の襖は長谷川派の畫家のかいたものではあるが、恐らく

は等伯ではなくて等伯に近い人であるし、今日まで私が近畿諸寺院や個人襲藏家について見た多數の長谷川派の作品の中にはこの襖畫と様式の同一なものは一もなかつたと言ふより外はない。

私が明らかに等伯筆と推定してゐるものは、智積院の屏障畫である。これについてはその後なほ研究をつづけて來てゐるが、今日では智積院屏障畫筆者等伯説は最も確實度の高い見方であつて、その反對點を見出すことの方が寧ろ困難になつて居り、今やその歸結を信じてゐるものは私だけではない。併し斯様の證明は文章の上では困難であり、實物の比較を以ては概ねは疑ひのない納得の出來るものであるから、私の説になほ疑念を持たれる美術史家には私はいつても實物について御説明をしたいと考へてゐる。柳橋水車圖屏風筆者がその款識畫印の如く等伯であることは、これまた今や多く疑念の提出せられない見方であつて、右屏風は同様に等伯の款識や畫印のある團藏烏鸞圖屏風（私もその實蹟に接してゐるのである）大徳寺藏竹猿猴圖屏風とグループをなして同一様式のものであり、かくも等伯の款識畫印ある作品のすべてを眞作でないとか代表作でないとかいつて一々に否定するよりは、等伯がその様式のもののかいたと見るが、概念を以て事實に屈服せしめた見方であらうと考へてゐる。これについても疑念者ある限りは、他日詳論をかいいて見たい。

正誤文として餘りに長くを書いてしまつたが、要するに私の所説としては、妙蓮寺屏障畫筆者未確定、智積院屏障畫筆者等伯、柳橋水車圖、烏鸞圖の屏風筆者は款識及び畫印の如く等伯となすものであつて、それだけのことを正誤文として述べて置きたい。なほ終りに、屏障畫の比較研究についてはあらゆる視角より見方の投ぜられることが研究を進歩せしめる所以であるから、田中氏を始め諸氏より御示教を仰ぐことは私の最も感謝するところであるし、なほ所謂桃山期の款識畫印ある新資料として觀察せられたものがあるならば、これまたつねに御示教を仰ぎたいと切願する次第である。

美術研究所時報

寄贈新刊圖書

唐宋元明清畫家人名辭書 中山梨軒編
小杉放庵畫集 正木直彦氏

第十一回朝鮮美術展覽會圖錄 朝鮮總督府美術展覽會編 同氏

A. Godard, Y. Godard & J. Hackin, Les Antiquités Bouddhiques de Bamijân. (Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, Tome II) J. Hackin 氏

日本美術協會報告二五

建築雜誌五五九—五六一 朝鮮と建築二一〇七、八

帝國工藝六〇七、八 滿蒙一三〇八、九

史述と美術二一、二二 思想一二三、一二四

Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol. XXVII, No. 7

Bulletin of the Museum of Fine Arts, Boston, Vol. XXX, No. 180.

Economic Review of the Soviet Union, VII, 12, 13-14.

第八號 熊谷宣夫芭蕉夜雨圖考補遺

叔英宗播の遊印は「水石疊々」或は「木瓜疊々」謙巖原沖の遊印は「中虛」と讀まれ得る。

吹き墨の例は他に殆んど見ないとしたが、根津嘉一郎氏藏傳牧溪「ぬれ雀」に於いて見られる。

惟肖得巖の七言律は四韻に當るもので當らざる如く思はれるとしたのを訂正する。